



# 元気っ子

No.288 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

子ども集団の中心に大人がいて、アレコレ指示を出して何かを教えたり指示したりすることが保育の目指すかたちではないということは先月の元気っ子でお話をさせて頂きました。そのことをもう少し詳しく書かせて頂きます。

ながさわ保育園が大切にしている保育は、大人が子どもに言葉で言って（指示して）させる保育の真反対です。「自分でやろう」と心が動いてやれるようになる自律を目指しています。とは言い、全てのことを自分でやれるようになることが集団生活における自律とは違います。集団の中では、自分ができないことをきちんと自分で分かって、それを人に頼むことができたり、やりたいことができるようになるためにはどうしたらいいかをきちんと聞いてくるような子どもになって欲しいと思っています。

かつて、とある地方の保育園で「トイレに行く時間だよ、手を洗いなさい、静かにしなさい」と言って育てた子どもたちが小学校や学童に行ったらお漏らしをしたり、手を洗い忘れたり、人の話を聞けない子になってしまったという話を聞いたことがあります。自分で行きたくなったらトイレに行く、気持ち悪いから手を洗う、うるさいと大切なことが聞こえないから静かに聞く、こうした自律（その反対は他律）を育ててあげないと、困るのは子どもたち本人なのです。

大人が望む行動ばかりを口やかましく言って聞かせることを繰り返していると、子どもは自分でやるという体験ができなくなってしまいます。自分で自分の心に決めること、やりたいことを自力でやってみて、その結果を正面から見つめて責任感を感じることに、自分が原因で物事が変わる経験をする、こうしたことには失敗がつきものです。しかし自分で決めてやったことは、人のせいにはできないので、自分を知る経験になっていきます。こんなとき大人は「だから言ったでしょ！」と思ってしまうのですが、それは禁物です。実際に自分で経験して、失敗して、考えることが大切なので、是非、ご家庭でも、子ども自身に、感じたり、考えたり、迷ったり、気持ちが揺れ動く幅を大きくとってあげてください。その幅が大きければ大きいほど子どもは成長を見せてくれます。

この自由度が少ないと、子どもは自分で決めたいことを求めて「言うことを聞かない」「返事をしない」「大人が困ることをする」さらにはそれを否定するともっとやります。そうではなく、子どもが「自分でこうしてみた、そしたらこうなった、だから次はこうしてみたい」という好循環を作り出さないといけないのですが、そのためには大人は「子どもを信じてじっと待つ」という心構えを持つ必要があります。

言って聞かせてできるようになるのは「他律」です。そうではなく、自分のことは自分で判断して適切な行動が選択できる自律した姿をご家庭と一緒に育てていけたらと思います。「良いこと・悪いこと」の決まりは伝えながらも、子どもが自分で決めて判断して行動に移せるように支えていくことがこれからの保育・育児には大切であり、そのためには「子どもを丸ごと信じる」ということが第一歩になると思います。

